

再

日本名家经典文库

精装插图版

起风了

日文全本

〔日〕堀辰雄 著

堀辰雄

世界图书出版公司



起风了

日文全本

〔日〕堀辰雄 著

世界图书出版公司
上海·西安·北京·广州

图书在版编目(CIP)数据

起风了: 日文 / (日)堀辰雄著. —上海: 上海世界图书
出版公司, 2017.5

(日本名家经典文库)

ISBN 978-7-5192-2428-8

I. ①起… II. ①堀… III. ①小说集-日本-现代-日文
IV. ①I313.45

中国版本图书馆CIP数据核字(2017)第038696号

-
- | | |
|------|---|
| 书 名 | 起风了(日文全本) |
| | Qifengle (Riwen Quanben) |
| 著 者 | [日] 堀辰雄 |
| 责任编辑 | 苏 靖 |
| 封面设计 | 高家鋆 |
| 插 画 | 丁天天 |
| 出版发行 | 上海世界图书出版公司 |
| 地 址 | 上海市广中路88号9-10楼 |
| 邮 编 | 200083 |
| 网 址 | http://www.wpcsh.com |
| 经 销 | 新华书店 |
| 印 刷 | 杭州恒力通印务有限公司 |
| 开 本 | 787mm×1092mm 1/32 |
| 印 张 | 7.25 |
| 字 数 | 116千字 |
| 版 次 | 2017年5月第1版 2017年5月第1次印刷 |
| 书 号 | ISBN 978-7-5192-2428-8 / I · 62 |
| 定 价 | 32.00 |
-

版权所有 翻印必究

如有印装错误, 请与印刷厂联系
(质检科电话: 0571-88914359)

出版说明

“日本名家经典文库”系列，是我们为国内广大日语学习爱好者精心策划和编辑的日语阅读丛书，也是今后重点打造的丛书品牌，旨在为各层次日语水平的读者提供原汁原味的语言学习素材。此次推出的作品来自夏目漱石、芥川龙之介、堀辰雄等文学名家以及宫泽贤治、小川未明两位童话作家，具体包括以下九个品种：《我是猫》《夏目漱石短篇小说选集》《芥川龙之介短篇小说选集》《起风了》《菜穗子》《堀辰雄短篇小说选集》《银河铁道之夜》《宫泽贤治童话悦读选集》《小川未明童话悦读选集》。选取的体裁广泛，以长篇、中短篇小说（尤其是具有日本文学特色的“私小说”）为主，亦收录了在日本耳熟能详且广泛传阅的童话作品。

策划之初，我们邀请了研究日语语言、日本文学的专家老师，精选足以代表日本文学的名家名作。所收录作品尽可能覆盖到作者创作的各个时期，以便让读者了解作家在不同时期的思想变迁以及当时的社会百态。也正是由于作品创作、发表的年代不同，部分作品中个别日语语句的

用词、表达形式等，与现代日语的习惯不尽一致。除了特别必要而进行技术性处理之外，一般不做统一修改或添加注释，以尊重原作者，保留原著风貌。

读日语原文，学地道日语，赏日本文学——这是我们推出这套丛书的初衷和希望。在阅读过程中，不仅能潜移默化地提升日语水平，还可以体味不同作者的文笔特色，加深对日本文学和日本社会的了解与感悟。后续还将出版更多久负盛名的文学大家作品，并会推出日汉对照系列，敬请期待。

“日文全本”以全日语形式呈现，内附日式插画。装帧上，我们邀请了工艺美院的设计专家倾力打造，采用了相对古典的日系风格。圆脊精装，便于翻阅和收藏。清新的封面色彩配上大气的黑色腰封，有着强烈的视觉冲击。置于书架上，便是一道赏心悦目的文学风景。

阅读过程中，有任何疑问或见解，欢迎关注我们的微信公众号并留言，届时会有各种精彩活动。以书会友，从阅读“日本名家经典文库”开始。

最后，祝各位阅读愉快！



火月

今度の作品を、さういふ音楽に近いものにさせたがつてゐるんだ。この前の手紙で僕は、いつか君に話した題材はすっかり諦めてしまつたやうに書いたけれど、実は、まだあれはすこし未練がある。ただ、それを直接に描きたくないのだ。その点で、僕は音楽家が非常に羨ましくなつてゐる。音楽はそのモチーフになつた対象なり、感情なりを、すこしも明示しないで、表現できるんだからね。だから、今度の作品をそんな音楽に近いものにして、僕のそんな隠し立を間接にでも表現ができれば、とてもいいと思ふんだ。

——堀辰雄「葛巻義敏への書簡」（「『美しい村』のノオト」）

目次

美しい村

序曲

3

美しい村 或は小遁走曲

11

夏

59

暗い道

87

風立ちぬ

序曲

99

春

107

風立ちぬ

125

冬

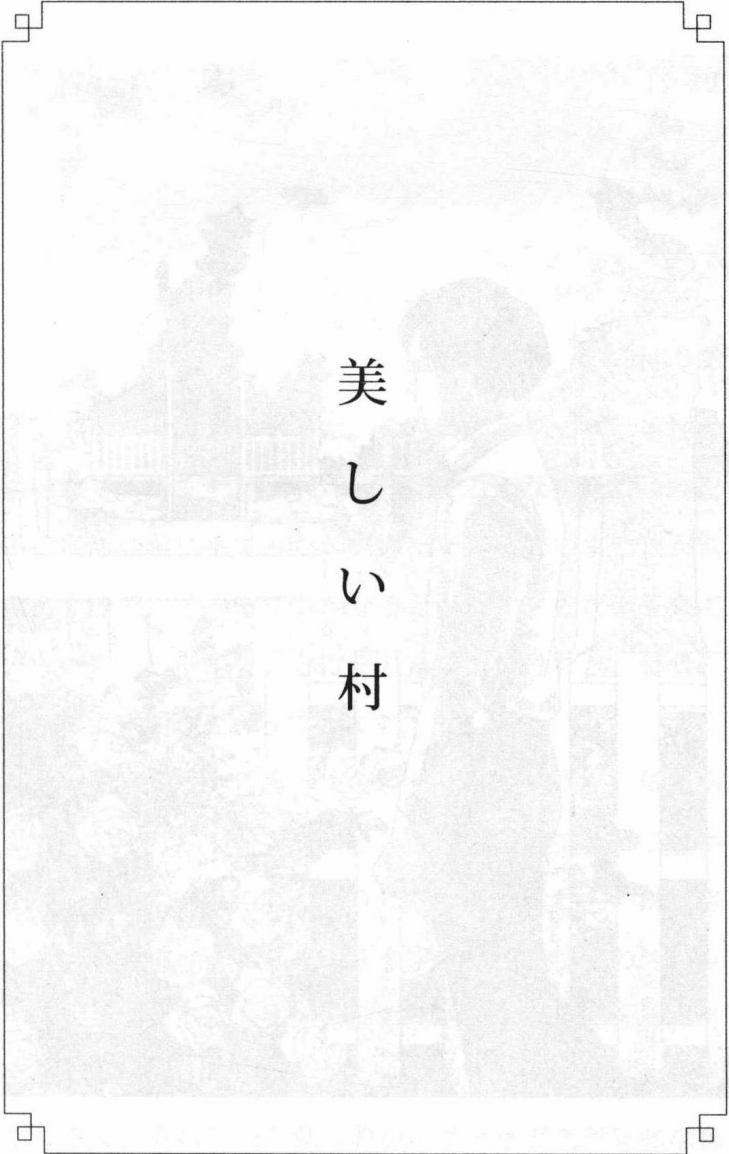
173

夜

194

死にかげの谷

202



美
し
い
村



序曲

六月十日 K…村にて

御無沙汰^{ごぶさた}をいたしました。今月の初めから僕は当地に滞在^{たいざい}しております。前からよく僕は、こんな初夏に、一度、この高原の村に来てみたいものだと言っていました、やっと今度、その宿望^{わけ}がかなった訣^{たれ}です。まだ誰も来ない^{きび}ので、淋しいことはそりあ淋しいけれど、毎日、気持のよい朝夕を送っています。

しかし淋しいとは言っても、三年前でしたか、僕が病気を^{ちが}して十月ごろまでずっと一人で滞在していたことがありましたね、あの時のような山の中の秋ぐちの淋しさとはまるで違うように思えます。あのときは籐^{とう}のステッキに^{やまみち}すぎるようにして、宿屋の裏の山径などへ散歩に行くと、一日毎^{ごと}に、そこいらを埋^{うず}めている落葉の量が増える一方で、それらの落葉の間からはときどき無気味な色



をした^{きのこ}茸がちらりと覗^{のぞ}いていたり、或^{あるい}はその上を赤腹
(あのなんだか人を莫^ば迦^かにしたような小鳥です) なんぞが
いかにも横着^{ひとけ}そうに飛びまわっているきりで、ほとんど
人気は無いのですが、それでいて何だかそこら中に、人々
の立去^{あと}った跡^{ただよ}にいつまでも漂^{ただよ}っている一種^たのにおいのよ
うなもの、——ことにその年の夏が一きわ花やかで美し
かっただけ、それだけその季節の過ぎてからの何とも言
えぬ侘^わびしさのようなものが、いわば凋^{ちようらく}落^{らく}の感じのよ
うなものが、僕自身が病後^わだったせい^ちか、一層^ちひしひしと
感じられてならなかったのですが、(——もっとも西洋人
はまだかなり残^{まれ}っていたようです。ごく稀^{まれ}にそんな山径^ま
で行き逢^あいますと、なんだか病^やみ上がり^やの僕^うの方^{さん}を胡散^う
くさ^{さん}そうに見て通り過^うぎましたが、それは僕^うに人^{さん}なつか
しい思^ういをさせるよりも、かえってへんな侘^わびしさをつ
のらせました……) ——そんな侘^わびしさがこの六月^うの高原^{さん}
にはまるで無^ういことが何^{さん}よりも僕^うは好^{さん}きです。どんな
人^う気^{さん}のない山^う径^{さん}を歩^ういていても、一^う草^{さん}一^う木^{さん}ことごとく生^う
き^{さん}生^うきとして、もうす^うっかり夏^{さん}の用^う意^{さん}が^うでき、その季^う節^{さん}
の来^うるのを待^うっているばかりだと言^うった感^うじがみ^うな^うぎ^う
つて^ういます。山^{やま} 鶯^{うぐいす} だの、閑^{かん}古^こ鳥^{どり} だの、元^{げん}気^きよ^うく 囀^{さえず}ること

といたら！ すこし僕は考えごとがあるんだから黙っ^{だま}ていてくれないかなあ、と癩癩^{かんしゃく}を起したくなる位です。

西洋人はもうぽつぽつと来ているようですが、まだ別荘などは大概閉^{たいがいとざ}されています。その閉されているのをいいことにして、それにすこし山の上の方だと誰ひとりそこいらを通りすぎるものもないので、僕は気に入った^{かつこう}恰好の別荘があるのを見つけると、構わずその庭園の中へは行って行って、そのヴェランダに腰^{こし}を下ろし、煙草^{たばこ}などをふかしながら、ぼんやり二三時間考えごとをしたりします。たとえば、木の皮茸^{かわぶ}きのバンガロオ、雑草^{おしげ}の生い茂った庭、藤棚^{ふじだな}（その花がいま丁度見事に咲^さいています）のあるヴェランダ、そこから一帯に見下ろせる^{もみからまつ}樅や落葉松の林、その林の向うに見えるアルプスの山々、そういったものを背景にして、一篇^{べん}の小説を構想したりなんかしているんです。なかなか好い気持です。ただ、すこしぼんやりしていると、まだ生れたての小さな^{およ}蛸が僕の足^{おそ}を襲ったり、毛虫^{ぼうし}が僕の帽子に落ちて来たりするので閉口です。しかし、そういうものも僕には自然の僕に対する敵意のようなものとしては考えられません。むしろ自然が僕に対してうるさいほどの好意を持っ



ているような気さえします。僕の足もとになど、よく小さな葉っぱが海苔卷のりまきのように巻かれたまま落ちていますが、そのなかには芋虫いもむしの幼虫が包まれているんだと思うと、ちょっとぞっとします。けれども、こんな海苔卷のようなものが夏になると、あの透明とうめいな翅はねをした蛾がになるのかと想像すると、なんだか可愛らしい気もしないことはありません。

どこへ行っても野薔薇のばらがまだ小さな硬い白い蕾つぼみをつけています。その咲くのが待ち遠しくてなりません。これがこれから咲き乱れて、いいにおいをさせて、それからそれが散るころ、やっと避暑客ひしょきやくたちが入り込んでくることでしょう。こういう夏場だけ人の集まってくる高原の、その季節に先立って花をさかせ、そしてその美しい花を誰にも見られずに散って行ってしまふさまざまな花（たとえばこれから咲こうとする野薔薇もそうだし、どこへ行っても今を盛りさかに咲いている躑躅つつじもそうですが）——そういう人馴ひとなれない、いかにも野生の花らしい花を、これから僕ひとりきりで思う存分あいがんに愛玩しようという気持は（何故なぜなら村の人々はいま夏場の用意いそがに忙しくて、そんな花なぞを見てはられませんから）何ともいえず



に爽やかさわかで幸福です。どうぞ、都会にいたたまれないでこんな田舎暮らしいなかくをするようなことになっている僕を不幸だとばかりお考えなさないで下さい。

あなた方は何時頃いつごろこちらへいらっしゃいますか？ 僕はほとんど毎日のようにあなたの別荘の前を通ります。通りすがりにちょっとお庭へは行ってあちらこちらを歩きまわることもあります。昔むかしはあんなに草深かったのに、すっかり見ちがえる位きれい、綺麗な芝生しばふになってしまいましたね。それに白い柵さくなどをおつくりになったりして。……何んだかあなたの別荘のお庭へはいつでも、まるで他の別荘の庭へほかはいているような気がします。人に見つけられはしないかと、心臓がどきどきして来てなりません。どうしてこんな風にお変えになってしまったのか、本当におうらめしく思います。ただ、あなたと其処そこでよくお話したことのあるヴェランダだけは、そっくり昔のままですけれど……

ああ、また、僕はなんだか悲しそうな様子をしてしまった。しかし、僕は本当はそんなに悲しくはないんですよ。だって僕は、あなた方さえ知らないような生の愉悦ゆえつを、こんな山の中で人知れずあじわ味っているんですもの。でも一



体、何時ごろあなた方はこちらへいらっしゃるのかしら？
あなた方とはじめて知り合いになったこの土地で、あなた方ともう見知らない人同志のように顔を合せたりするのは、大へんつらいから、僕はあなた方のいらっしゃる前に、この村を出発しようかと思ひます。どうぞその日の来るまで僕にも此処こゝにいることを、そしてときどき誰も見ていないとき、あなたの別荘のお庭をぶらつくことをお許し下さい。

またしても、何と悲しそうな様子をするんだ！ もう、止よめます。しかし、もうすこし書かせて下さい。でも、何を書いたものかしら？ 僕のいま起居しているのはこの宿屋おくの奥はなの離れごぞんじです。御存知でしょう？ あそこを一人せんりょうで占領えんがわしています。縁側おもから見上げると、丁度、母屋やの藤棚が真向うに見えます。さっきもいったように、その花がいま咲き切っているんです。が、もう盛りもすぎたと見え、今日あたりは、風もないのにぼたぼたと散りこぼれています。その花に群がるみつばち蜜蜂みといたら大したものうなです。ぶんぶんぶんぶん唸うなっています。この手紙を書きながら、ちょっと筆を休めて、何を書こうかなと思つて、その藤の花を見上げながらぼんやりしていると、な



んだか自分の頭の中の混乱と、その蜜蜂のうなりとが、
ごっちゃになって、そのぶんぶんいつているのが自分の
頭の中ではないかしら、とそんな気がしてくる位です。
僕の机の上には、マダム・ド・ラファイエットの「クレ
エヴ公こうしゃく爵夫人」が読みかけのまんまページ頁をひらいていま
す。はじめてこのフランスの古い小説をしみじみ読んで
いますが、そのお蔭かげでだいぶ僕も今日このごろの自分の
妙みょうに切迫せつぱくした気持から救われているような気がしていま
す。この小説についてはあなたに一番その読後感をお書
きしたいし、また黙ってもいたい。二三年前、あなたに
無理矢理にお読ませした、ラジイゲのぶとうかい「舞踏会」は、こ
の小説をお手本にしたと言われている位ですから、まあ、
あれに大へん似ています。しかし「舞踏会」のときは、
まだあんなにこだわらずに、その本をお貸しが出来たけ
れど、そしてそれをお読みになってもあなたは何もおっ
しやらなかつたし、僕もそれについては何もお訊ききしな
かつたが、それでもあ或る気持はたがお互いに通じ合っていた
ようでしたけれど、いま僕は、あの時のようにこだわら
ずに、この小説の読後感をあなたにお書きできるかしら？

第一、この手紙にしたって、筆をとりながら、果して



あなたに出せるものやら、出せそうもないものやら、心
の中では躊躇^{ためら}っているのです。恐らく出さずにしまうか
も知れません。……こんなことを考え出したら、もうこ
の手紙を書き続ける気がなくなりました。もう筆を置
きます。出すか出さないか分かりませんが、ともかく
も左様^{さよう}なら。